全裸身体検査を万引きの冤罪で男性警官にされるJKの話

17歳の高校2年生、小林花香は、放課後のショッピングモールで友達と別れた後、雑貨店に立ち寄っていた。彼女は肩まで伸びる黒髪を軽く払い、白いブラウスに紺のプリーツスカートという制服姿で、棚に並ぶキーホルダーやヘアアクセサリーを眺めていた。手に持ったカバンは少し重く、教科書や筆記用具が詰まっている。雑貨店の明るい照明とポップな音楽が、彼女の気分を軽くしていた。

花香はアクセサリーコーナーで、キラキラ光る小さなピアスに目を奪われた。棚に吊るされたピアスを手に取ろうとカバンを肩に掛け直した瞬間、カバンの角が棚に軽く当たった。「あっ」と小さな声を上げたが、特に

何も落ちた様子はない。彼女は気にせずピアスを手に取り、鏡で合わせてみる。結局、買うのはやめて棚に戻し、店を出ようと歩き出した。

その瞬間、背後から低い声が響いた。
「ちょっと、そこのお嬢さん。」振り返ると、店の女性店員と屈強な警備員が鋭い視線で彼女を見つめていた。店員は30代半ばくらいで、口元に厳しい線を浮かべている。「カバンの中、見せてもらえますか？」その言葉に、花香の心臓がドキンと跳ねた。「え、私、なにか…？」と戸惑いながら呟くが、店員はすでに彼女のカバンに手を伸ばし、ファスナーを開けた。花香はただ立ち尽くし、頭が真っ白になる。店員がカバンの底を探り、小さなビニール袋に入ったキラキラしたアクセサリーを取り出した。「これ、君が持ってたものよね？」

花香は目を丸くし、首を振った。「そんな！私、知らないです！」声が震え、喉が締め

付けられるような感覚に襲われる。だが、店員は冷ややかな笑みを浮かべ、「ふーん、よくある言い訳ね。監視カメラにも映ってるから、言い逃れはできないわよ」と言い放つ。警備員が彼女の肩に手を置き、「署まで来てもらうよ」と低い声で告げた。花香の膝がガクガクと震え、涙が滲む。「お願い、信じてください！私、盗んでない！」と叫んだが、誰も耳を貸さなかった。周囲の客が好奇の目で彼女を見つめ、まるで自分が犯罪者になったような錯覚に陥る。カバンの中のアクセサリーがなぜそこにあるのか、彼女には全く心当たりがなかった。

警察署の取調室は、薄暗く、空気が重かった。花香は硬いプラスチックの椅子に座らされ、両手を膝の上でぎゅっと握り締めていた。心臓がバクバクと鳴り、手のひらは汗でべたついている。目の前には、中年の男性警察官が座っていた。50歳前後で、髪は薄く、鋭い目つきが花香を貫く。机の上に

は書類が広げられ、彼女の名前や住所が記載されている。警察官は無表情で書類をめくりながら、低い声で言った。「小林花香、17歳。雑貨店での万引きの疑いだ。店の監視カメラに、君がアクセサリーをカバンに入れるような動きが映ってる。」

花香は首を振った。「違います！私、そんなことしてない！本当に知らないんです！」声が上ずり、目には涙が溜まる。彼女の頭の中では、店での出来事が何度も繰り返されていた。ピアスを手に取ったこと、カバンが棚に当たったこと。でも、アクセサリーをカバンに入れた記憶は一切ない。警察官は眉を少し上げ、冷たく笑った。「まあ、そう言う子は多いよ。物証もあるし、店員の証言もある。言い訳しても無駄だ。」その言葉に、花香の胸が締め付けられた。無実なのに、なぜこんな目に遭うのか。彼女は唇を噛み、涙をこらえた。

警察官は椅子に座り、腕を組んだ。「とりあえず、身体検査が必要だ。カバンに隠してた以外にも、服や体に何か隠してるかもしれないからな。」花香の心に冷たい恐怖が広がった。「身体検査…？」と呟くと、警察官は淡々と頷いた。「規則だから仕方ない。女性職員が今他の案件で手が離せない。俺が担当するが、問題ないな？」その言葉に、花香の息が止まった。男性警察官に検査されるなんて、想像しただけで体が震える。「そんな…お願いです、女性の人に…」と小さな声で懇願したが、警察官は鼻で笑った。「贅沢言うな。早く済ませたいなら、さっさと従え。」彼の声には威圧感があり、花香の反論を押し潰した。

警察官が立ち上がり、「こっちの部屋で検査する。ついてこい」と促した。花香は立ち上がるが、足が鉛のように重い。彼女はカバンを握り締め、まるでそれが最後の盾であるかのように抱えた。検査室への短い廊

下を歩く間、彼女の頭はぐるぐると混乱していた。無実なのに、なぜこんな屈辱を受けなければならないのか。涙が頬を伝い、制服の襟に染みを作る。

検査室は狭く、蛍光灯の白い光が無機質に部屋を照らしていた。中央には小さな金属製のテーブルと椅子が一つずつ。壁には大きな鏡が貼られ、花香はそれがマジックミラーだと直感した。誰かに見られているかもしれない。その想像だけで、彼女の背筋に冷たいものが走る。警察官はドアを閉め、鍵をかけた。カチャリという音が、花香の心臓を締め付けた。「さあ、服を全部脱いでくれ。隠してるものがないか、しっかり確認する。」警察官の声は事務的だが、どこか楽しんでいるような響きがあった。花香の顔がみるみる赤くなり、両手で制服の裾をぎゅっと握った。「全部…ですか？そんな、恥ずかしいです…お願い、こんなの嫌

です…」声は小さく、消え入りそうだった。彼女の目は涙で潤み、唇が震えている。

警察官は腕を組み、彼女を見下ろした。「規則だ。嫌ならここで何時間でも待機させるぞ。それとも、もっと面倒なことになる方がいいか？」その言葉は穏やかだが、明確な脅しだった。花香の胸は恐怖と屈辱で締め付けられ、息が苦しくなる。彼女は自分が無実だと信じていたが、この状況でどうやって証明すればいいのかわからなかった。涙が頬を伝い、床にぽたぽたと落ちる。「お願いです…本当に何もしてないんです…」と呟くが、警察官は無表情で「早くしろ」と一言。花香は目を閉じ、震える手でブレザーのボタンを外し始めた。